法の水茎

大正大学講師　髙橋秀城

(72)

郭公
鳴くや五月の
あやめ草
あやめも知らぬ
恋もするかな

（『古今和歌集』不知）

（ほととぎすが鳴いている。五月に飾られる菖蒲ではないけれど、私は筋道を見失うぐらいの恋をしているよ）

旧暦五月を迎えて、紫陽花や睡蓮、梔子や花菖蒲などの花々が、この時期の五月雨を浴びながら色鮮やかに輝いています。

冒頭の和歌では、「あやめ」の語が繰り返されています。植物の「菖蒲」から、同音の「文目」という言葉を導き、「文目も知らぬ」（理性を見失う）ほどの恋心を告白しています。何かを訴えかけるように鳴くホトトギスの姿に、自らの「恋路の闇」を重ねているのでしょうか。

夕暮れに響く雨音を、恋人が家を訪ねて来てくれて「トントン」と戸を叩く音に聞き紛う日もあったかもしれません。

季節は初夏を感じる時節から、いよいよ「夏至」（一年で昼の時間が最も長くなる日）が近づいてきました。ちょうど梅雨の最中でもあることから、あまり太陽のお顔を拝むことはできませんが、梅雨明け宣言とともに、一気に夏の陽差しが降り注ぎます。

五月雨を浴びる紫陽花

このように、今日という日は、一見昨日と変わらないように見えて、ゆっくりと、そして確実に移ろっています。思えば桜を愛でた春は、どこに行ってしまったのでしょう。遙か彼方に遠ざかってしまったように感じられます。

仏教では、この世の全てのものが移り変わることを「無常」（諸行無常）と言います。この言葉でまず思い出されるのは、軍記物語の代表作『平家物語』の序章ではないでしょうか。

祇園精舎の鐘の声、
諸行無常の響あり。

（祇園精舎の鐘の音には、「諸行無常」を説く響きがある）

学校の授業などで暗記された方も多いでしょう。七五調のリズムに乗せた和漢混淆文が心地良く響きます。

祇園精舎とは、お釈迦様が説法をなされたお寺です。そのお寺から「諸行無常」の教えが鳴り響くというのですが、いったいそれはどのような教えでしょう。

『平家物語』に先行する平安時代の歴史物語『栄花物語』には、もう少し詳しく記されています。

かの天竺の
祇園精舎の鐘の音、
諸行無常、是生滅法、
生滅滅已、寂滅為楽
と聞こゆなれば、

（『栄花物語』）

（あのインドの祇園精舎の鐘の音は、「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」と響き聞こえるというので）

ここでは、「諸行無常」（この世の全ては移り変わる）に続いて、「是生滅法」（全ては生じては滅していくもの）、「生滅滅已」（移り変わりの世から抜け出せば）、「寂滅為楽」（はじめて本当の安らぎが得られる）という文言が付け加わっています。これは、お釈迦様の入滅（お釈迦様の死）を説く『涅槃経』というお経に見られる「四句偈」と呼ばれるものです。実は『平家物語』の冒頭に響く鐘の音には、「諸行無常」だけではなく、この四句の教えが説き示されているのです。

『涅槃経』「四句偈」をめぐる話は、日本の説話集にも語り継がれています。

昔、雪山（ヒマラヤ山脈）に一人の苦行者がいました。名を雪山童子と言いました。まだ仏様がいなかったので、お経を読むことができませんでした。

ある時、どこからともなく、「諸行無常、是生滅法」という声が聞こえました。雪山童子は喜び辺りを見回すと、恐ろし

折り折りの記 (106)

青梅雨にはまりし高尾祈り山

波多野　重雄

青葉若葉の茂みの中に薬王院の燈明の灯が点る。人々はこの季節お山に登り英気を養う。この時期降る雨を五月雨と書き、さみだれという。

一年の中で一番鬱陶しい季節である。梅雨の最中の晴を五月晴と言ひ、爽快な気分に浸る。六月は夜が短く昼が長い。高尾参道下に紫陽花が群生。又、六月は野鳥の営巣期でお山は鳥声の交響曲を奏でる。時鳥、郭公、筒鳥等数えきれない。

『おくの細道』の旅を続けた芭蕉は旧五月二日、福島を発って五月二十九日に最上川に到着。「**五月雨をあつめて早し最上川**」を詠む。

（高尾山健康登山の会々長）

下富士山（二）

厚木市　荒井　一雄

板をかつぎ
ひたすら登る君と僕
いつか幸せ来ると願ひて

富士山を下る（二）

雪上滑降（夏山スキー）、飛ぶ燕の如く、
回旋（回転）、跳飛、復た回旋…

『六根清浄』を左右の回転の毎に唱へ、
真白き氷雪の上に、
月輪のごとき真円を描く…

雪上滑降如飛燕
回旋跳飛復回旋
六根清浄唱毎毎
白氷雪上描真円

い姿をした羅刹（悪鬼）がいます。

童子は尋ねました。「あなたはどこで、この偈文を聞いたのですか。残りを説いてくれたなら、私は、一生、あなたの弟子になります。どうか教えてください」と。

すると羅刹は、「我は飢え疲れている。もしお前の肉体を食べさせてくれるなら教えてやろう」と答えます。

童子は、羅刹の言葉を聞くと、身に付けていた鹿皮の衣を脱いで、羅刹のために座を敷きました。心を尽くして敬うと、羅刹は、「生滅滅已、寂滅為楽」と説いたのでした。

童子は深く心に刻み、後の世の人のために、辺りの石や壁、道の木々などに、この偈文を書き留めると、高い木に登って、約束通り羅刹に身を投げました。

ところが、童子の身体が地に着く前に、羅刹は帝釈天の姿に還って、空中で童子を受け止めると、童子に向かって「あなた様こそ真の菩薩（修行者）です。どうか未来にお救いください」と伏し拝むのでした。

半偈のために身を投げた雪山童子とは、今のお釈迦様のことなのです。

（『三宝絵』）

雪山童子は、命をかけて後半の二句を得ました。自分だけではなく、後の世の人のために書き付け、「後に来る人は必ずこの文句を見よ」と、辞世を覚悟して発した言葉に胸打たれます。今こうして「無常」という言葉を知っているのも、お釈迦様の「捨て身の行」があったからに他なりません。

梅雨空からは冷たい雨が落ちています。雨に潤う草木の成長を感じれば、いつしか無常を感じる心（無常心）が身に付くでしょうか。曇天の大空を仰ぎ見ながら、お釈迦様の勇気ある一途な行動に恋い焦がれます。

（栃木北部教区普濟寺）

髙尾山天狗まつり

五月十八日（金）